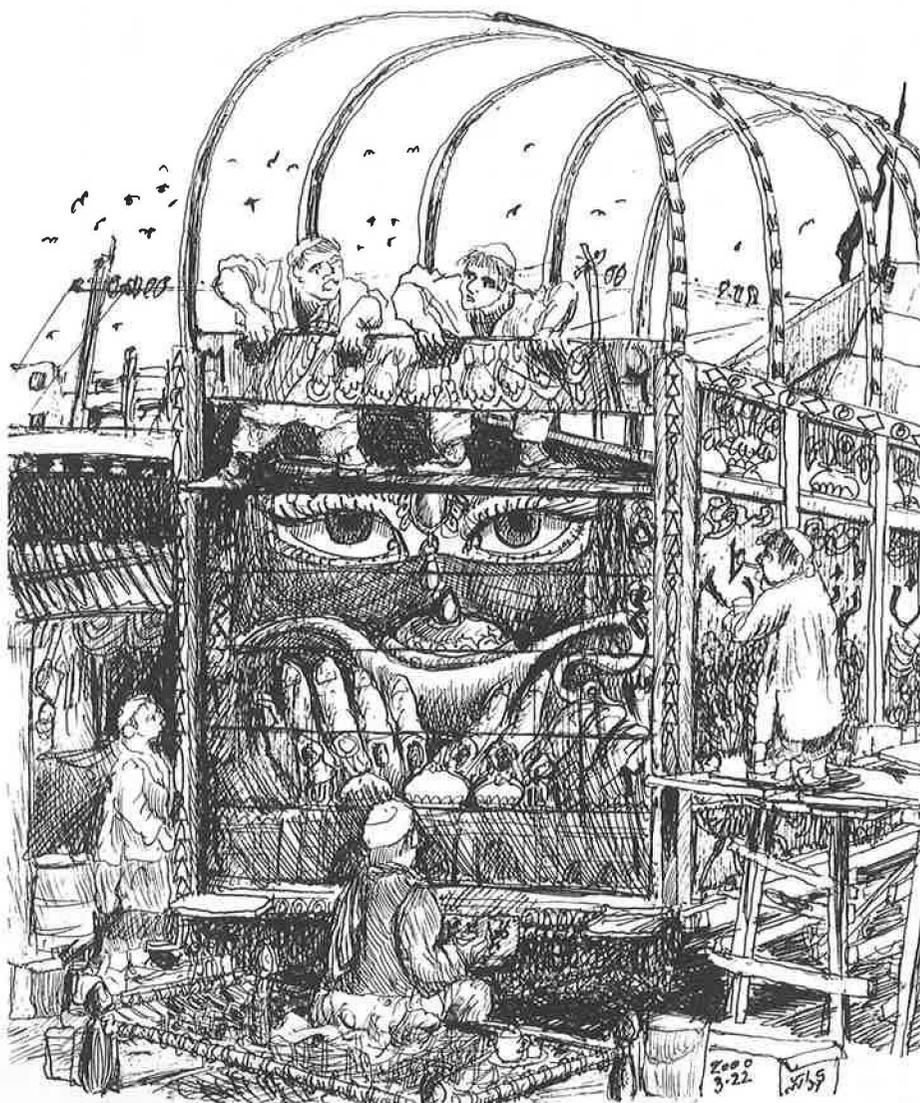


# ペシャワール会報

No.63



ペシャワール会 〒810-0041 福岡市中央区  
 大名一丁目10-25 上村第一ビル三〇七号  
 電話 ○九二(四三二)一三三七  
 FAX ○九二(七三二)一三三七  
 分室 (FAX) ○九二(七二五)三四四〇

挑戦	中村 哲
教育体制の基盤づくりが着々と進行中です	小林 晃
ペシャワールは国のまほろば	藤井卓郎
混乱のペシャワールにて	見立英史
子供たちがいつしか本気に	篠崎真理子
誤解を生むNHKの表層的編集	福元満治

ペシャワール会の活動は、1983年9月、中村医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々についての理解を深めていきたいと願っています

ペシャワール会インターネット

ホームページ <http://www1.mesh.ne.jp/peshawar/>

電子メール [peshawar@mx.mesh.ne.jp](mailto:peshawar@mx.mesh.ne.jp)

# 挑戦 嫉妬・怨恨・陰謀・邪推の渦巻く中で

PMS（ベシャワール会ジャパン・医療サービス）院長 中村 哲

## 久方ぶりの春

みなさま、お元気ででしょうか。十数年ぶりに日本の三月を楽しんでいます（いつもこの季節は現地なのです）。実は、三月十日に「日本ハンセン病学会」で講演を頼まれ、すぐまたベシャワールに戻るようになっていますが、今度いつまた日本の早春にお目にかかれるかと思うと名残惜しく、役得と割り切ってつかの間の滞在を数日延期しました。

ハンセン病学会に出るのは、恐らく最初で最後になるでしょうが、かつて赴任直後に私が指導を受けた諸先生たちとお会いでき、楽しいものでした。しかし、その背後で告発や訴訟問題があると聞き、複雑な思いを拭えませんでした。とは言え、ベシャワール会の活動が、日本の患者を含めて多くのハンセン病関係者たちの共感と興味をひき、私をわざわざ遠くから呼び寄せて頂いたのは何よりも嬉しいことでした。

## JAMSを解体、吸収

さて、間もなく日本の早春に別れを告げますが、

現地は今、会が発足して以来の大きな変化が進行しています。一九九八年四月のPMS（ベシャワール会医療サービス）病院の開院式の後、苦心惨澹の末、やっと新態勢が軌道に乗り掛かろうとしているからです。

今後の組織構成は以下の通りで、JAMSの名称は以後一切使用せず、「PMSアフガン・プロジェクト」と呼びます。

文字通り国境を越えた統合病院で、それまで事実上組織として動いていた旧JAMSをいったん完全に解体してPMS（ベシャワール会）の一部とし、パキスタン側事業と統合、実質的に直接の指揮下に入るのです。これは既に一九九七年十二月の段階で決定されたことではありませんが、新病院建築の遅れや病院機能の整備に追いまくられて、先送りされていたのでした。

## 「不可能だ」

拙著『医は国境を越えて』で少し触れましたが、この統合過程は並大抵のものではなく「不可能だ」との声さえあったのです。しかし、今後三十年を視野に入れますと、アフガン難民が溢れていた時



回診中の中村医師

期の野戦病院的な設定では先行きおぼつかず、法的に不安定な上、二重投資を避けて予算削減を図る上でも、「安定した基地統合病院」が不可欠となり、先にキャンペーンを繰り広げた病院建設となった訳です。

これは、ひとつの挑戦を意味しました。実際、ナシヨナリズムのおつかり合い、嫉妬、怨恨、陰謀、邪推の渦巻く中で、過去最大の精力をつぎ込んだといっても誇張ではありません。詳しいことは省略しますが、パキスタン側を代表したハンワリー事務長が疲れて退き、アフガン側のシャワリ

医師には小生から辞職か新組織で継続かを突きつけました。やや強圧的な姿勢だと不快に思われる向きもありましょうから、誤解なきよう説明しますと、現地職員百五十名の中で、日本人職員三名は多勢に無勢。しかも常に我流にプロジェクトを解釈、特にアフガン側は目を離せば首都カーブル重視で半独立状態、所期の目的であるハンセン病や山村無医地区診療の大原則を逸脱、ペシャワール会の方針と真つ向から対立していました。

新生PMS病院は、ことごとく直接・間接の妨害に遭遇、診療モラルの低下さえ見られました。強力な指導なくしては事業そのものが分解すると見た私たちは、意を決して昨年九月以来の大規模な綱紀引き締めと実質行動を準備したのです。まず藤井さんを筆頭に事務管理態勢が強化され、小林先生・藤田看護婦の指導の下で医療教育態勢が再組織化されました。怠業や分派活動、血族・郷党意識による秩序の弛緩を徹底的に押さえ込み、規律を回復。辞職十数名、二十名に迫る処分者を出しました。

**人事・財政とも本格的な態勢へ**

前後して管理陣にイクラムラー元少佐(事務長)、アユーブ元州知事秘書官(事務次長)を迎え、本格的な布陣となりました。藤井さんの奮闘で事務財政管理を一本化、さらに小林先生が先頭に立ち、医師から初めて人事異動をPMS病院の決済で行なうようにし、診療面でも若い医師たちを主力にして技術刷新が図られました。雇用も公募・面接という方式を採用、「新トレーニング・コース」

を発足、十八名の若者を厳選して厳しい訓練で育てるようにしました。

こうしてPMS病院の診療モラルを回復し、人事・財政をペシャワール会直接管理とした上で、最後通牒を突きつけて旧JAMSを解体・再編し、ここに会が始まって以来の強力な新指導態勢の布石が打たれました。昨年九月以来、緊張の連続で、藤井さんを初め、徹夜に近い作業さえ珍しくありませんでした。診療数は年間二十万名のレベルに復しつつあります。

今でこそ言えますが、規律違反者の容赦ない処分を開始したとき、「毒食わば皿まで」の心境で、身の危険を感じないこともなかったのです。特に「飲酒事件」に関連する職員の辛づる式摘発と処分は、古参のシャワリ医師の係累に及び、彼自身もブラックリストに上げられた程です。

それでも、この間、コーヒスタン診療所の常駐態勢が正式にしかれ、診療レベルは向上、やっと病院らしくなってきました。あとは今後日本人長期ワーカーをいかに確保するかが焦点になってきています。現在の陣容は、ウルドゥ語学院で本格的に現地語を修め、パキスタンになじんんだ連絡員の藤井さん、これもかつてなかった最強の陣容ですが、やはり過労が目につくことがあります。病院に目を向ければ、そこは緑の芝生のじゅうたん、大きくなり始めた木々が目を和ませてくれます。人の世の騒がしさから、しばし解放されます。花も草も決して何か意図あって人を楽しませているわけではありません。かれらが生きている、そのことが美しく映るのです。私たちの活動もこ

うありたい、と思うことしきりです。会員や事務局の皆様も暇を見つけてぜひ、見に来て下さい。日本と現地と力を合わせ、血を流して築いた、自慢の緑のオアシスです。



一九四六年福岡市生まれ。九州大学医学部卒。一九八四年パキスタンのペシャワールに赴任。現地ミッション

病院で、ハンセン病コントロール計画を柱にしたアフガン難民診療に携る。一九八六年、JAMS(日本-アフガン医療サービース、九八年に全体のプロジェクトに編入)アフガン・プロジェクト)を設立、長期的展望に立ったアフガン無医地区での診療モデルを創設。現在アフガン・プロジェクトは一つの病院と三つの診療所を設立し、アフガン人の無料診療に当たる。一九九四年、ハンセン病根絶のための病院PLS(ペシャワール・レプロシ-サービース)を設立、北西辺境州における本格的なハンセン病コントロール計画に着手し、病院に来ることのできない山岳地帯の患者への巡回診療と基地診療所の建設を行なう。一九九八年十月には恒久的統合病院PMS(ペシャワール会ジャパン・医療サービース、七十床)を建設。パキスタン側では他に現在二つの診療所を運営する。現在現地スタッフ約一五〇名、日本人スタッフ五名。年間診療数約二十万人

## \*ワーカー通信

## 教育態勢の基盤づくりが

着々と進行中です

PMS医師 小林晃

## トラブル

中村先生の不在中、院長代行という大役を初めて引き受けることになりました。

この間、いろいろな問題が起らないか不安な日々を過ごしていたラマザン中、終礼前の管理者会議が長引いたため、スタッフのみんなを約十分間待たせてしまったことがあります。この時、PMS病院で一番古くからいる年配の医師が、われわれ管理者に対して、みんなの前で「遅いぞ」というような発言をしました。私は、その場では無視していましたが、このような発言を許しておく、規律が乱れて統率が取れなくなり、大きな問題に発展しかねないと考えました。そこで、私よりも十歳も年上のこの医師を呼んで厳重に注意したところ、この医師は素直に非を認め、以降我々に協力してくれるようになりました。このような小さな問題はありましたが、何とか無事に時

が過ぎ、中村医師がペシャワールに帰ってこられました。

## 技術向上に奮闘

さて、以前中村医師から「医師としての基本的な技術が未熟である」との指摘があり、今回は心電図及びレントゲン写真の読み方の指導を始めました。心電図に関しては、週二回、テスト形式で講義をしました。レントゲンに関しては、過去に私自身が日本で集めたレントゲン写真の症例を使って講義をしました。胸部レントゲンでは、同一症例のCTスキャンと比較して説明することにより、かなり基本的な力がついてきたと思います。

胸部エコーに関しては私が指導してきたシャキール医師が、かなり上達してきたため、以前に行なった試験で成績が優秀であったアフガン人のハッデイ医師を次に指導することに決めました。このようにして順に基本のできた医師から技術を伝えていこうと思っています。

## 大学病院が異例の協力

また、日本大使館からの援助で心エコーのプログラムが手に入りましたので、心エコーの指導も始めました。こちらの外来では心臓弁膜症の疾患が大変多く見られます。これは先進国のように抗生物質が広く行き渡っておらず、リウマチ熱が多いためと考えられます。成人患者の完成された弁膜



スタッフに講義中の小林医師

症だけでなく、日本など先進国では稀な小児の活動性のあるリウマチ熱の弁膜症疾患も多く見られます。従って、心エコーは病院としてぜひとも必要な検査です。

しかし、指導するといっても私自身は心エコーに関しては全くの素人ですので、シャキール医師と一緒に教科書やビデオを見ながら始めましたが、なかなか満足にいきませんでした。そこで、私がシャキール医師に「日本から専門家にきてもらい、ちよっとしたコツを教えてもらえば早いのに」と言ったところ、彼が「ペシャワールの大学病院に頼めばひよっとすると教えてくれるかも知れま

せん」と言いました。そこで、PMS病院からの正式な依頼文書を持たせて、シャキール医師に大学病院の願いに行かせることにしました。

大学病院の内科の教授は「君たちの病院のことはよく知っており、慈善病院として患者さんのために昔から努力していると聞いている。私自身は君が勉強に来ることは歓迎である。しかし、今までこういった例がないので教授会で承認が必要である」と言ってくれたそうです。幸い教授会でも承認が取れ、彼を正式に勉強に行かせることができるようになりました。そこで、中村医師も私自身も多忙で、多くの医師を一度に十分に指導できる時間がないため、近々始める予定の内視鏡と脳波に関しても大学病院で基本的なところを指導し



診察中のPMSスタッフ

てもらおうと、同じように大学病院に依頼しました。この時は勉強に行かせるのはパキスタン人ではなくアフガン人の医師でしたが、あっさりと受け入れてくれることになりました。

後に知りましたが、ペシャワールの大学病院で、こういう形で研修を受け入れるのは、今まで例がなく初めてのこのようです。しかし、我々の病院が慈善病院ということで受け入れてくれたそうです。もちろん、これまで十六年間にわたってペシャワールで活動してきたペシャワール会の活動に対する信用がなければ難しかったかもしれない。

#### 病に国籍はない

さて、中村医師が二月上旬に帰ってこられ、ひとつとしたのも束の間で、懸案のPMS病院とJAMSとの再編統合が始まりました。本来PMS病院ができたのは、今後、長期にわたり事業を続けるための安定した基地病院としての意味のほかに、入院、事務、検査室、薬剤、そして厨房などの業務をJAMSと一本化して予算を削減することになりました。しかし、シャワリ院長を始めとした一部のJAMSのスタッフより大きな抵抗があり、また移動に伴う混乱のために十分な時間がないため、これまで実現しませんでした。彼等の中には「JAMSはアフガニスタン人のための病院。PMSはパキスタン人のための病院」と思っている者もいるようです。しかし、病院にアフガン人、パキスタン人など国籍は関係ありません。実際、PMS病院の患者の約半分はアフガン人です。

我々はアフガニスタン国内の活動を縮小するのではなく、ペシャワールでの活動を一本化して予算を削減し、将来アフガニスタンでの活動を広げることが考えています。しかしながらJAMSの一部のスタッフには、JAMSの過去の栄光が忘れられず、ペシャワールでのJAMSの活動が縮小していくのに絶えられないようです。この間、例の如く「日本人はパキスタン人にだまされて、JAMSを潰そうとしている」など、いろいろな噂が飛び交いました。

#### もっと勉強したい

さて、一部統合に向け、まずは英語ができて若いJAMSの医師を、PMS本院に定期的に勉強に来させることに決めました。シャワリ医師を初めとするJAMSの管理者と相談して決めるといろいろ話が長くなり、なかなか先に進みません。そこで今回は「PMS本院からの命令」ということで、事務レベルでJAMSの医局長を直接呼んでこの話を進めました。当初、少しは抵抗があると思いましたが、意外にも全く問題なく受け入れられました。むしろ、医局長から「PMS本院に定期的に勉強に来ることができない医師から不満が出るのではないか」という答えが返ってきたのには驚きました。少なくとも医師に関して言えば、ほとんどの人がPMS本院に来て、もっと新しいことを勉強したいと感じているようでした。JAMSの若い医師の一人に、ダウドという医師がいます。彼の父親は、アフガニスタンの医師であれば誰でも知っている有名なカーブル大学の生

化学の元教授で、アメリカのハーバード大学に留学したことがあるそうです。以前から彼は非常に優秀で、まじめな医師であるという噂を聞いていました。彼自身、以前PMSで医師募集を行なった際に、シャワリ院長に内緒で申し込んだということがありました。

### 留学制度もスタート

そこでまず始めに、彼をJAMSからPMS本院に呼びました。彼はPMS本院に来ることができたことを非常に喜び、患者のために一生懸命こちらで働き、勉強しました。そして、PMSの医師たちにも大きな刺激を与えました。今年から優秀でやる気のある医師をイギリスの熱帯医学学校に留学させることに決めましたが、まず今年、PMSでもっとも優秀でPLS（ペシャワール・らい・サービス）病院以来、五年以上ペシャワール会のために働いているシャキール医師を送ることにしています。来年は中村医師と相談し、このJAMSのダウド医師を送ることに決めました。JAMSとPMSの医師の一部交流が始まってから、後ろ髪を引かれながら、私は日本での仕事のため一時帰国することになりました。その後、事務、検査室、厨房と順に、統一していく予定でしたが、帰国して電話で中村医師に聞いてみますと、それも順調に進んでいるようでした。

さて、私は帰国後、日本で約二ヶ月働いた後、五月にペシャワールに行く予定にしています。五月には順調に統合が進んでいることを願うばかりです。

## ペシャワールは国のまほろば

PMS現地連絡員（会計担当）

藤井卓郎

### シファール・ハーナ

ペシャワールの三月は日本の、と言っても広いので私の居た神奈川の五月のようだ。だいたい暑くも無し寒くも無しの気候で、テレビの天気予報でもペシャワールの最低気温が一〇℃を切る日は無くなった。雲雀は鳴かない、でも心地良い日差しの中で雀・鳥が遊び、南国の小鳥達が鳴き交わす。病院の芝生は広々として美しい。そこで患者さん達が寝そべって休む。今は英国教会ペシャワール教区教育総監督として多忙で、極たまにしか訪れてくれなくなった前事務長のハンフリーさんが「藤井、病院は美しく整備しなければね。入院する患者さんが院内の環境によって癒されるくらいに」と言っていたのが思い起こされる。芝生・庭の整備に対しては常勤庭師のアサラムは勿論、院長補のジャー医師、そして中村医師ご自身の努力が大であった。ペルシャ語（のアフガン方言であるダリー語）では病院のことをシファール・ハーナ（癒しの家）と言う。この病院を真の癒しの家として築きあげるための試練は続いている。会員

の皆様の物心両面に亘るご支援を今後ともお願いしたい。

### 「ほかに誰もやらないからだ」

先日、現地の活動に携わる主だった現地人スタッフを集めて、中村医師がペシャワール会の活動方針について話された。特にアフガンプロジェクトの担当者達の間で活動方針に対する誤解が生じているようであったので、目標を共有するためであった。これはペシャワール会の古くからの不変の活動方針であるが、ハンセン氏病と類似の身体障害を伴う疾病の治療を第一の目的とする。そしてハンセン氏病の多発地帯であるパーキスターン北西部・アフガニスタンの山岳地帯に活動を集中する。そして活動の拠点はペシャワールに置く。つまりペシャワール会の活動はカラコルム・ヒンズークシユ山脈を相手にする僻地医療だということである。

なぜこうした活動を中心にするのか、中村医師は「ほかに誰もやらないからだ」と言われる。ハンセン氏病の多発地帯の一つであるここパーキスターンにおいてハンセン氏病専門医はわずか三人、一人はカラチに、もう一人はラーワルピンデイーに居る。三人目がペシャワールの中村医師である。勿論アフガニスタンには誰も居ない。巨大なこの山塊の中に点在するハンセン氏病患者の発見と治療にまともに取り組んでいるのは中村医師とその率いるPMSのみなのである。「皆のやることは俺はやらんで、ほかのみんなに任せておけばよか」。

中村医師が「俺はやらん」と決めたことの中にアフガーニスタンの首都カーブルに乗り込んで彼国の保健医療に重きをなす、というのが有る。困ったことに一部アフガーニスタン人スタッフはこれを目指したが。過去にはペシャワールで行う活動も、アフガーニスタン東北部山岳地帯の三診療所の為の基地病院という、有るべき姿を離れ、彼らの望む将来のカーブル病院の雛型のようなものであったらしい。

しかし一国の保健医療全般を引き受ける補給力は一NGOの力量を超える上、アフガーニスタンの軍事政治宗教情勢が好転すれば諸機関・諸団体がカーブルで活動を始めるとは必定なのだ。将来に亘って省みられる可能性の無いハンセン氏病診療と山岳僻地に焦点を合わせ、限られた財源を投入していこうというのが中村医師の考えだと思ふ。どうせやるなら手の届くこと、必要とされていて、実際に人々の役に立てること。

### ペシャワールにこだわる理由<sup>わけ</sup>

二年ほど前に会員の皆様をお招きして仮開院式を挙げたこのPMS新病院は、庭のみではなく診療設備・事務設備等も整ってきている。まさにペシャワール会現地活動の不動の基地となりつつある。中村医師は最近事あるごとに「私はもう半分ペシャワール市民ですよ。もう何処にもいきません」と言われる。

ではなぜペシャワールにこだわるのか。スタッフ達を前に中村先生は壁に貼られた地図を指し示された。この基地病院の手足である五つの診療所

を設けているところ、患者さん達が私達を必要としている山岳地帯を一つ一つマークしていかれた。パークスタンのコーヒスタン地区、ラシュト村(チトラール地方)、アフガーニスタンのガラエ・ヌール渓谷、ダラエ・ピーチ渓谷、ワマ村(すべてクナール河沿い)。そしてそれら全てにアプローチする入り口にあたっていているのがここペシャワールであったのだ。ペシャワールはパークスタン北西辺境州の首邑と言のみならず、カラム・ヒンズークシユ山脈の隣にあたっていたのだ。

### 緑の海に

ここのとこ街のあちこちで羊や牛がベイントを施されたりリボンをつけられたり、ささやかなおめかしをして引かれていく光景が目についた。あたかもデコレーションケーキのように。

今日はイード・アル・アズハー(イスラーム教の犠牲祭)。羊や牛は今日の食卓に供される。大量の家畜が屠られ貧しい人々にも振舞われるので、一年に一度だけ全ての人がたらふく肉を食べられる日。PMS病院の周りの畑では麦の苗が丈を増し、病院は緑の海に浮かんでいるようである。緑の海の中に転々と見える煉瓦や泥作りの家々から朝げのかまどの煙が昇っている。そしてその向こうに望むのは、ハイバル峠、コーヘ・サフエード(「白い山脈」但し見た目は茶色)、アードムヘール峠。今日はイード(祭り)の日。春を迎えたペシャワールし麗し。

表紙をめぐる小さな物語 25

### ハジ・ウスタド・アユブ・ハーン

甲斐大策

アユブ・ハーンはこの日、路傍の草にまだ露が光っている早朝から仕事場に現れ、修復ずみの自作の板絵に温かな表情で見入っていた。

小作人の四男アユブは、十二歳の時ペシャワール旧市街のローリー(トラック)サラリーの塗装職人のもとへ徒弟に出され、十年を経てナクシャワラ(絵師)となった。以来二十八年、マツカ巡礼を除き休みなく働いてきた。

九十年代に入り、ジュラルミンの荷台をもつ日本やドイツの大型ローリーが普及、英ペドフォード製ローリーの時代は終ろうとしていた。ボディの上に、カラチのダウ船造りみたいになる荷台を築き、外壁全面の装飾を施す仕事は激減してきた。

斜眼気味の小さな瞳が鉤鼻近くに寄ったアユブのけわしい顔立ちに、ここ何年か、眉間の皺が深まっていた。それがこの日、微笑さえ浮かべている。

先週アフガンの運送業者が持ちこんだ車は、八十年代、アユブ自身が手がけたものだった。女の瞳と月下の宮殿は、得意なモチーフである。美女は「ライラ」であり、ムガル宮廷の女であり、アユブの夢の中に生きる女達だった。背後の小屋で、友人の麻薬捜査官ジャミルが吸う水筒の音がぼこぼこ鳴っている。酷暑の夏が近い。

一族が生活できる農地は手にした。そろそろ引退してもいい、とアユブは考えていた。

\*:アラビアの伝承悲恋詩「ライラとマジユン」の美女。ライラへの愛に滅びてゆくカイスの狂気(マジユン)を謡う。ペルシャ十二世紀、ニザミーによる詩篇でも有名。ライラは、「夜」を意味する。

## \*ペシワール訪問記

## 混乱のペシワールにて

九州大学歯学部三年 見立 英史

## 初の海外旅行が……

春先、現地は日本より少し暖かく、過ごしやすい気候である、ということと「現地を見ておきたい」との希望から、この春休み中に行ければ……と考えていた時、八尾ペシワール会の尾形さんが一週間ほど行かれるとのお話をお聞きし「荷物持ちでぜひ連れてってください！」（逆にお荷物になった？）と、三月二十四日から三十日まで現地に行くこととなりました。

私は今回が初の海外旅行です。そう、初めての海外がバキスタンなのです（珍しい……）。パスポート・ビザの申請など初めての経験ばかりです。バイト上がりの制服のまま、疲れた顔で撮った写真のパスポートは、まるでどこかの作業員。「よく出来てますね」と税関で止められないか心配です。

ビザ申請書も辞書を片手に何とか書き上げ、三ヶ月の旅行ビザを戴きました。

一番心配なのは食事と病気です。A型肝炎、腸

チフス、赤痢などなどに注意が必要ということと文献、ウェブサイトを見てまわり、抗体接種も考えましたがいくつかの薬を持って、また基本である「熱を通した物だけ食べる」ことで、現在、体調に異状はありません。

今回は大阪からは尾形さん、酒井さんが来られ、成田で合流、現地から希望のあった調達物資を確認してチェックイン。空路イスラマバードへ向かいました。

三・五時間でまず北京に到着、乗客の乗降と機内清掃、給油で一時間ほど待機（この間、機外に出られません）。同じ便には登山に向う旅行者が四団体同乗していたので日本人ではほぼ満席。機内には新聞、週刊誌が数誌。北京まで日本人の乗務員がいる以外はほとんど英語で、TVもコメデイ・デイズニーと全部英語。十時間も過ごすわけですから、もつと本を持っていくべきでした。

## 朝礼にて

イスラマバード到着は夜十一時。「おおー異国だー。ここが首都の空港かー」と見つつ入国審査は無事パス。現地ワーカーの蓮岡さんのお迎えで三時間弱かけてスタッフハウスの到着しました。もう夜中二時過ぎですから、皆さんはすでにお休みです。我々はゲストルーム二部屋に泊めていただきました。各々に手洗、風呂があり、食堂が共用です。置き手紙に「翌朝、重大発表があるので云々」と、何やら大きな事が起こりそうな気配。

翌朝、PMS分院（旧JAMS）の朝礼に参加させていただきました。

朝礼で中村先生は四月七日の統合に際して、辞職する者は申し出るように、との発表をされました。日本の感覚では上司、それもトップの命ですから、それには基本的に従うものであり、何らかの反論があれば後で直接に話し合う、などが普通ですが、この発表の場でシャワリ医師が怒った表情で中村先生に何か主張しています。ペルシャ語ですが、表情でだいたいはわかります。

シャワリ先生は「現地の人を使い捨てにしている」との意見だったそうです。医療の場であるとともに教育も行い、できるだけ失業させないよう別の部署で働けないかを模索するなど、現地の人のことを考えてやってきたわけですが、これでは全く誤解しておられます。

## ものすごい時期に来てしまった

朝礼の後も話し合いは続きましたが、結局、シャワリ先生は辞職するそうです。旧JAMSの分院はシャワリ医師をはじめとするその親族が多く働いています。

この影響により今後どれだけの混乱が起きるだろうか、と思うとしばらく気の抜けない日々になりそうです。さすがに私もこうなることまでは考えていませんでしたので、ものすごい時期に来てしまった、と思っています。

四月七日に始まる新体制に向けて、我々三人が三十一日に帰国した後も、現地ではワーカーの方々の多忙な日々が続きます。

## \*会員からのお便り

### ●チャリティーバザーを開いて 子供たちがいつしか本気に

粕屋町立粕屋中央小三年担任 篠崎真理子

#### 総合学習の一環として

私たちがペシャワール会を知ったのは、事務局の安部さんとの出会いからだ。安部さんとは、私と安部さんのお姉さんが同級生ということで同窓会名簿を見られてコンサートに誘って下さったことから始まった。

今、学校では総合学習といって、子どもたちに加えて学教を教えるだけでなく、将来生きていく上で困らないように問題を解決する力や地域やその他の者への関心を広げ、いろいろな学ぶ力や努力する力を付けようとしている。ボランティア活動もその一つで粕屋中央小学校では「思いやりの心を育てよう」ということをめあてにボランティア活動に取り組ませている。三年生も何か取り組ませようと考えているとき、たまたま安部さんの存在を思い出した。三年生にとって、海外まで手を伸ばしてのボランティアはちよつとやりすぎとも思っていたが、つてを知らなかった私たちは安部さんと

のつながりから始めるしかなかった。

#### 知らなかったことばかり

まず、ペシャワール会の活動そのものを知らなければならなかった。安部さんから貸していた中村哲医師の本やビデオは、はつきりいって知らなかったことばかりだが衝撃をうけた。感動した。こんなに身近に素晴らしい活動があったことに感動し、何かしてやりたいと思った。この感動は、今受け持っている子どもたちも同じようだった。だから、何かしよう、何か役に立つことをしたいと考えた子どもたちはバザーを開いてお金を集めることまで考えついた。

それから、ペシャワール会の人たちとの関係が始まった。全部で三回ほど学校にも来ていただいたし、色々自分たちのしておられる活動や思いを話していただいたことが、子どもたちの今後の生き方にまで影響を与えるぐらい強く印象づけられた。

#### 強い気持ちで

子どもたちは、中村哲医師のために、また、ペシャワールの困っている人たちのためにという強い気持ちで、したこともないバザーのための宣伝活動（学校のみんなにビデオで趣旨を知らせ、協力を呼びかけたり、それぞれのクラスに行ってお願いしたり、ポスターで地域の方々にはバザーのことを知らせる）をしたり、物を集め、それに値段を

付けるなど準備は思いもよらず時間がかかった。最初は半信半疑だった子どもたちも段々やる気を出し、本気になってきたようだった。私たちに本当にできるのだろうかという気持ちもあつたようだが、やっている内にやりとげなければという気持ちになったようだった。

それは、担任も同じだった。バザーでたくさんの方々に協力して頂いたときは本当にうれしかったし、満足だった。その気持は子どもたちも同じで達成感みたいなものを感じることができたようだった。

最後に事務局の林さんに来て頂き、募金を渡すことができたとき、子どもたちの感動も頂点に達したようだった。そして、この活動を一生忘れたいと感想を書いてくれた子も何人もいた。私たちは、この感動とこのつながりをたった一回に終わらせてはいけな思っている。

最後になりましたが、色々ご協力頂いたペシャワール会の方々、どうもありがとうございます。

#### ▼事務局ボランティア募集▼

\*継続的に協力していただける事務局ボランティアを募集しています。①パソコンを扱える方②経理に明るい方③日常的な事務作業の手伝える方、事務局まで一報下さい。

#### ▼未使用の切手、ハガキを！▼

\*会報の発送費に、年間百万円以上がかかっております。未使用の切手・書き損じのハガキ等お送りいただければ幸いです。（古切手は扱っておりません）

## 「21世紀をになう君たちへ」(NHK)の波紋と診療費等一部負担制について 誤解を生むNHKの表層的編集

事務局広報担当 福元 満治

### 全国から反響

今年の一月一日に放映された(二月三日再放送)、NHK「21世紀をになう君たちへ」をご覧になった方も多いこと存じます。コンボ、チェルノブイリ、ペシャワール、ニューヨークを舞台にオムニバス形式で構成したドキュメント風の番組で、世界の各地でさまざまな困難と格闘する子ども達を主人公にしたものです。そのなかの一つに、私たちの現地プロジェクトを巡るエピソードが採り上げられました。

主人公はアフガン難民のスレイマン・サポール君で、午前中は絨毯工房で働きながら午後学校に通い、将来は医療関係の仕事に就こうと考えている十三歳の少年です。その彼が、ある日喉に異常を感じ、私たちのアフガンプロジェクトである旧JAMSを訪れます。医師は彼に扁桃切除手術の必要を伝え、それに要する薬の処方箋を渡します。ここで「中村さんの病院では、手術代は無料ですが、薬代は患者に負担してもらっています」との

ナレーションが入ります。スレイマン少年はその薬代五百ルピーを工面しようと奔走しますが、傷痍軍人の父を抱え、兄弟で家計(月収一千ルピー)を支える彼にはそれはかなわぬことです。番組の中では、難民や辺境の患者のために献身的に診療を続ける日本人医師として、中村医師も紹介されました。

番組放映後、全国から反響があり、「少年の里親になりたい」とか「奨学金を提供したい」との声が多く寄せられました。また、中村医師の活動に感動したので支援したいという申し出も少なからずありました。

前者の申し出に対しては、当会の目的はあくまでも医療活動を通して現地に寄与するという点なので、奨学金・里親という形での特定の個人に対する寄付は辞退いたしました。と同時に、PMSでは、患者の診療だけでなく若者の医療教育にも力を入れているので(病院の中に教育コースがあります)、指定寄付という形ではなく、私たちのプロジェクトを支援していただくことが、結果として現地の若者の自立を助けることにもなっ

ていると説明し、大半の方はそれで納得され、会への寄付を頂きました。

### 後味の悪さ

今回の番組によって、アフガン難民への関心や私たちのプロジェクトへの関心がいくらかでも喚起されたのでしょうか。もちろん番組を見た方々から思いがけずたくさん寄付が集まりました。ところが関係者(事務局・会員)のなかからは、今回の番組を視聴したあと、後味の悪いものが残ったという感想が多く出されました。もちろんドキュメンタリーというのは、それぞれの立場によって、同じ作品から異なるメッセージを受け取る場合があります。

私たちにとって見過ごせないのは、NHKのいささか表層的な編集によって、我々のプロジェクトへの誤解が生じたということです。それは次の三点に要約されます。

1 少年が、貧しさゆえに五百ルピーの薬品代が払えず手術が受けられないという「物語」を軸にすることで、地元病院だけでなく難民のための病院、私たちの病院からも排除されているように見えた。

2 診療費一部負担制に対して、薬品代が全額患者負担であるかのような誤解を招いた。

3 プロジェクトへ寄せられている会費・寄付・助成金が、薬品代には使われていないような誤解を受ける。

後味の悪さの原因をたどると主には前記した三つの理由によるのですが、番組を批評的に見るな

らば、ストーリーが二つに分裂していて、それぞれがクロスするところがなかったところに原因があると思われます。つまり「貧しくとも健気に夢を追う難民の子供」というストーリーと「ハンセン病患者やアフガン難民を献身的に診療する日本人医師」というストーリーが別々に進行して最後まで交わることがなかったからです。番組の中では、私たちのプロジェクトが難民にとって唯一頼りになる病院であるとの説明があり、現地の金銭本意の医療を批判する中村医師のインタビューもありました。ところが五百ルピーの処方箋を突きつけられて孤軍苦闘する少年の「物語」の前では、その言葉も白々しく響くわけです。もちろんNHKには私たちのプロジェクトを批判したり歪曲しようとする意図はなかったはずですが、しかし番組を作る姿勢があまりにも、常套的に過ぎたといえます。

「先生、難民の貧しい子供の家を訪ねてもらえませんか。」

「私はドクターであって、アクター（役者）ではない。帰りなさい。」

これはNHKの制作担当者と中村医師が現地で行った会話です。担当者に悪意はなくともある種の固定観念があったことは否定できないと思えます。

### 私たちの側にも問題

もちろん問題は、NHKだけではなく私たちの側にもあります。旧JAMSは日本人ワーカーの指摘を無視して不要な手術（扁桃切除）を頻繁に

行い、患者をPMSに送れば薬品代は五ルピーで済むところを、理解に苦しむ高額処方箋を出し続けました。内部事情をいえば、旧JAMSは私たちの助言を無視し独立割拠的に独走をする点で、医療水準をも著しく低下させていました。いわば今回の番組によって、私たちのプロジェクトであるJAMSの問題点も露呈したわけです。このことは私たち自身真摯に受け止めるべき問題で、今回のJAMSのPMSへの再編統合もその対応策のひとつです。

### 一部負担制の積極的意味

最後に、診療費等の一部負担制についても、誤解の無いよう再度説明しておきます。

私たちは、一年前までは、全ての患者に対して無料診療を行っておりました。それをペシャワールにある二つの病院、PMSは一年前から、旧JAMSは昨秋より治療費・薬品代を一部負担制にしました。ただ極貧層・ハンセン病患者・アフガン国内診療所・巡回診療・僻地診療所では今でも治療費・薬品代とも全額無料です。

一部負担制にした理由は、私たちの「財源に限りある医療を、可能な限りそれを最も必要とする患者に届くようにしたい」ということと、患者側の依存心（無料で当たり前という気持）を徐々に解消し、将来の自立に備えたいということにあります。つまり全額無料にすると、朝早くから近所の比較的「元気な患者」が並び、一日の診療数に限りがあるなかで、遠隔地の貧しい患者が排除されるということが起こります。おまけに「元気な

患者」はもらった薬をバザールで売り捌くということもたびたびです。

そこで一部負担制にすることで、「元気な患者さん」には遠慮していただき、どうしても治療の必要な患者さんには、治療費・薬品代の一部を負担してもらおうということでこのシステムに踏み切りました。それに都市部の住民は郡部に比べて比較的裕福ですので（元将校の息子スレイマン少年も現地では貧しいとはいえません）、自立心を養うことへの期待も込められているわけです。「財源がないから」という理由だけで、一部負担制にしたわけではないということもご理解下さい。

ちなみにPMSでの患者負担分は、診療費一五ルピー、薬品代五ルピー、入院費一〇〇ルピー（一ルピー＝二円）市内のバス料金が約五ルピーです。

この一部負担制については、現在来院する患者からとりたてて不満も上がっておらず、むしろ患者数は定着増加しています。現場スタッフからは、「診るほうも診られるほうも真剣勝負になった」と報告されています。

今回のNHKの番組を巡る波紋は、広報のありかたから私たちのプロジェクトの内実まで、さまざまな問題を提起しました。私たちは今後とも予断を排して、内部矛盾から目をそらすことなく、事実に基づきながら、「現地の医療から見放された患者のニーズに答えられるプロジェクト」を運営していくべきかと思えます。

●事務局便り

\*めまぐるしく旧JAMSをめぐる現地情勢が変化しています。四月七日に、旧JAMS改め「PMSアフガン・プロジェクト・ベシャワール診療所」の発足式をします。四月二日現在、シャワリ医師始め辞職者十八名、継続者四十八名ですが、一ヶ月以内に補充して六十名で再スタートです。私たちの姿勢は一貫しています。それは藤井さんが、中村医師の言葉として本文中で紹介している「他にだれもやらないからやる。みんながやることは、自分がやらなくても誰かがやる」ということです。その核になるのが、ハンセン病の多発地帯であるパキスタン西部とアフガン山岳地帯での診療活動です。そのためにも基地病院PMSの磐石の態勢が必要とされます。JAMSの解体再編の苦闘は、単なる組織上の問題ではなく、私たちの現地との関わり全体が試されているのだと思います。まだまだ情勢は流動的のご承知おき下さい。

\*NHKの番組をめぐる問題もいろんなことを提起しました(本文参照)。そもそも十日やそこらの取材で、ものごとの本質を伝えるのは無理だと

医は国境を越えて

中村哲 四六判上製三五〇頁 本体二〇〇〇円  
アフガン・パキスタンでハンセン病の根絶と山岳地帯での診療に携って十五年。宗教・民族・政治の軋轢と陰謀の地からニッポンに向けて放つ、苦闘のメッセージ

ダラエヌールへの道

中村哲 四六判上製三二六頁 本体二〇〇〇円

いうことです。もつとじつくり腰を据えれば、「貧困」についてももっと複雑で実りある問題を視聴者に伝えることが出来たのではと、残念です。ベ村から

八カ月前、この会の現地報告会があることを新聞で知り、中村医師等の活動報告に感動したのがきっかけで、何かお手伝いできることはないかと事務局に入入りするようになりました。水曜日の例会に出てみると、とにかく会員のみなさんの顔がイキイキしている。さらに、年四回会報を準備する時期になると、一段と輝きが増して気合も入り、事務局には、山笠(博多の夏祭り)にも似た盛り上がりを感じられます。一〇〇%ボランティアで運営されている事務局の中は、現地の医療活動を心から支援したいという雰囲気があふれていて、恐らくベ会設立以来、会員の中でずっと伝えられ守られてきた思いなのだろうと感じます。作業の合間に聞く現地訪問の体験談は興味深く、またおすすめ映画や食事などの情報交換、何気ないおしゃべりも楽しみのひとつです。

●ベシャワール会ハンセン病院建設基金  
郵便振替 〇一七三〇一九一三二四二一

ベシャワールにて

中村哲 四六判上製二六〇頁 本体一八〇〇円  
石風社 福岡市中央区大手門一八八  
電話 〇九二(七二四)四八三八

アフガニスタンの診療所から

中村哲 B6判並製二〇〇頁 本体一〇六八円  
筑摩書房 東京都台東区蔵前二六四  
電話 〇三(五六八七)二六七〇

会 則

- ① 本会の名称をベシャワール会とする。
- ② 本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンの医療活動を支援し、必要な情宣・募金活動とともにボランティア・ワーカーの派遣を行なうことを目的とする。
- ③ 本会は、思想・信条にとらわれず、「支えあい」の精神で一致して会を運営する。
- ④ 会員は一口年額三、〇〇〇円以上、学生会員一、〇〇〇円以上、特別会員一口一〇、〇〇〇円以上の年会費を納入する。
- ⑤ 会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
- ⑥ 本会は会誌の発行を、会員は会の拡大に努める。
- ⑦ 本会は総会に於て若干名の運営委員を選任し会の運営を行う。
- ⑧ 毎年の改選は毎年総会にて行う。
- ⑨ 毎年の一回総会を開き、会計報告および会の運営について審議する。
- ⑩ 本会の事務局をFARAHOUSE(千八〇一〇〇四一福岡市中央区大名一丁目一〇二五 上村第二ビル三〇七号 七三二(三三七二)内)におく。